St. Luke's International University Repository

Concept and Implementation of Service Learning at the Two Universities in the United States - Report of Observation Survey and a Workshop of University of Wisconsin, Eau Claire and University of Washington -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, 平林, 優子, 松谷, 美和子, 及川, 郁子, 酒井, 昌子, 大森, 純子, 麻原, きよみ, 菱沼, 典子, 香春, 知永 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1297

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

米国におけるサービス・ラーニング（地域参加型教育）の理念と取り組み
－ウィスコンシン大学とワシントン大学の視察調査とワークショップ報告－

田代　順子[1)]　大森　純子[2)]　平林　優子[3)]
麻原きよみ[2)]　松谷美和子[4)]　菱沼　典子[5)]
及川　郁子[3)]　香春　知永[6)]　酒井　昌子[7)]

Concept and Implementation of Service Learning at the Two Universities in the United States
－ Report of Observation Surveys and a Workshop of University of Wisconsin, Eau Claire and University of Washington －

Junko TASHIRO, RN, RMW, PHN, MA, PhD[1)]　Junko OMORI, PHN, PhD[2)]　Yuko HIRABAYASHI, RN, MNS[3)]
Kiyomi ASAHARA, PHN, PhD[2)]　Miwako MATSUTANI, RN, PhD[4)]　Michiko HISHINUMA, RN, MS[5)]
Ikuko OIKAWA, RN, MNS[3)]　Chie KAHARU, RN, MNS[6)]　Masako SAKAI, PHN, MNA[7)]

〔Abstract〕

Purpose This report describes the concepts and implementation process of *service-learning* in two leading USA academic centers, University of Wisconsin Eau Claire and University of Washington, in order to assess the applicability of a *service learning* for St. Luke's College of Nursing in Japan, for our Center of Excellence, "People-centered Care for Health Promotion" program that focuses on a community-based participatory approach.

Methods Qualitative data from notes and observations during two-site visit surveys and one workshop provided information regarding their activities and founding concepts. Using a content analyses we formulated eight aspects and these aspects were compared with each other.

Findings The two centers based their programs on the same concept of "Service Learning", thus, each aim or goal, and means or methods of centers were the similar, although their emphasis differed slightly. The U. of Wisconsin focused on education for university students to become good citizens who will be able to take social responsibility and to serve their community. The U. of Washington focused specifically on community service using the *Service Learning* program. Both centers were providing modules to facilitate students' reflection about their volunteer activities by using e-mail logs, consultations from advisors, and discussion sessions. We concluded that this *service learning* will be useful not only for our freshmen nursing students, but also for professional and higher educational institutions to serve or contribute to promoting community health.

〔Key words〕 service learning, community participatory, the United States, higher education

1）聖路加看護大学　研究法・国際看護学，St. Luke's College of Nursing, Research/International Nursing.
2）聖路加看護大学　地域看護学　St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
3）聖路加看護大学　小児看護学　St. Luke's College of Nursing, Child Nursing
4）聖路加看護大学　看護教育学　St. Luke's College of Nursing, Nursing Education
5）聖路加看護大学　基礎看護学　St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
6）武蔵野大学　基礎看護学　Musashino University, Fundamentals of Nursing
7）聖隷クリストファー大学　地域看護学　Seirei Christopher University, Community Health Nursing

2006年11月8日　受理

〔要　旨〕

聖路加看護大学において，「市民主導の健康生成」の拠点として新たな看護のあり方を追求している。新たな看護を支える教育アプローチとして，学生が課外で行っているボランティア活動を教育的に支援する目的で，平成14年から研究を進めている。

本調査の目的は，米国でのサービス・ラーニング先進大学の理念と取り組みを記述し，日本での活用を検討することである。

調査方法は，米国の2大学，ウィスコンシン州立大学オークレア校とワシントン大学のサービス・ラーニングの教育運用を，8視点から比較検討した。

結果は，2大学のサービス・ラーニングを比較して，共に，サービス・ラーニングの良き市民教育の基本理念・リフレクションを促す方法を基盤とし，選択性の共通科目として導入している点では共通していた。しかしながら，新入生の教養科目として位置づけているウィスコンシン大学と，地域ケア・サービス学習としているワシントン大学とでは，サービス・ラーニングの教育運営上異なっていた。今後，本学の「市民主導型健康生成」の学部教育法として「サービス・ラーニング」を活用して発展させたい。

〔キーワーズ〕 サービス・ラーニング，地域参加型，米国，高等教育

Ⅰ．はじめに

日本において，少子高齢社会の今，看護職が良き市民として，また看護専門職として，地域社会との協働を通して健康な社会づくりに貢献できる人材を育成することは，社会のニーズに応えて変遷してきた看護教育の大きな課題のひとつである。サービス・ラーニングは，教育改革および大学改革の議論の中で強調された“青少年の社会参加と社会貢献”の新たな学習形態として注目されている。サービス・ラーニングとは，「地域のニーズに沿ったサービスに参加（ボランティア活動）することによって意図的になされた経験学習であり，コースの教授内容を深め，市民としての責任感あるいは社会的価値を高めるような大学と地域とのパートナーシップあるいは連携によってなされる教育カリキュラム」である[1]。このサービス・ラーニングは，1960年代に米国で民主主義社会での個人主義あるいは利己主義から起こる問題を克服する方法として，あるいは大学が象牙の塔から変革する方策として推奨されてきた。現在，米国では看護教育の中でもサービス・ラーニングが広く取り入れられている[1)2)]。

聖路加看護大学においては，1990年にカリキュラムの見直しを行ってから15年余を経た現在，「市民主導の健康生成」の拠点として新たな看護のあり方を追求している。本研究者らは，平成14－16年度に文部科学省科学研究助成を得て，新たな看護を支える教育のアプローチとして，学生が課外で行っているボランティア活動を教育的に支援する目的で研究を進めてきた[3]。それに続いて平成17年度から再び文部科学省科学研究助成金を得て，「看護学における看護学でのサービス・ラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価」のテーマで研究を開始した。サービス・ラーニングを教育のアプローチとする研究枠組みを立て，初年度には，米国で先駆的にサービス・ラーニングを推進している2大学，ウィスコンシン州立大学オークレア校（以下 UWis オークレア）とワシントン大学（以下 UWas シアトル）の教育プログラム調査を実施し，両校から多くの実践情報を提供していただいた。

本稿では，これら先駆的な2大学のサービス・ラーニングの教育運用を比較検討したので報告する。

Ⅱ．研究方法

本研究班は，両大学の各センターと連絡をとり，2005年3月に UWis オークレア，2005年12月に UWas シアトルのサービス・ラーニングセンターを訪問し，教育プログラムに関する情報を得た。その後それぞれのセンター長を日本に招聘し，さらに情報を得た。得られた教育プログラムの情報を，その教育運用の共通性と違いについて分析するために，8つの視点，つまり，1．支援拠点，2．支援組織，3．開講コース，4．コース内容，5．評価・認定の方法，6．センターの機能，7．コミュニティ組織，8．今後の課題・その他の事項，を抽出し検討した。さらに，学生の学び方に関して記述した。

Ⅲ．結　果

両校のサービス・ラーニングの教育活動の，上記の8つの視点とサービス・ラーニングでの学生の学び方について検討した結果，両校のサービス・ラーニングの教育活動には，多くの共通性と違いが抽出された（**表1**）。以下，分類した視点に沿って調査結果を報告する。

表１　両大学の調査内容比較一覧

S-L システム	ウィスコンシン大学	ワシントン大学
支援センター	ウィスコンシン大学オークレア校 サービス・ラーニングセンター	カールソン・リーダーシップセンター& パブリック・サービス・センター
支援体制	専任教員（センター長）1名，非常勤数名，大学院生 オークレアボランティアコーディネーターネットワークとの連携・支援あり 大学の直属組織・助成も受けている	常勤の職員（コーディネーター）3名，非常勤，大学院生など ヘルスケアを学ぶ学生のための S-L 支援組織 CCPH のワシントン支部が近くにあり，常時，連携・支援あり
開講コース	必修と選択科目がある。単位認定コース120以上 看護学部は，13科目（コース）で開講 学科によっては必ず S-L が必修（看護も）もあり，単位化されないプロジェクトも他に多数ある	選択コースのみ 共通科目として30コース 共通科目の「看護」にもコースがある インターンシップとして入る場合もある 選択制，定例と単発のプロジェクトがある
コース内容	対象：大学生，全学年，各学科 年間履修生：約3000名	対象：大学生・大学院生，全学年，各学科 年間履修生：約80名
	基本は one－half（15時間），Full（30時間） （特殊な50時間というコースもある）	基本的には1コース5単位 10週間で多くとも20時間までコミュニティに出向いて活動する
	実践の前の講義や準備（救急蘇生などのトレーニングや文献講読）が必要な科目もある	講義・グループワークなどとの組み合わせながら，継続的にコミュニティに出ていく
評価認定	S-L 実施中：コミュニティパートナーと，教員／スタッフは定期的に会って，活動状況を評価 リフレクション：日誌とリフレクションペーパー センターが仲介し，プロジェクトのスーパーバイザーから評価を得，大学教員・スタッフ・学生に評価を返す。リフレクションが終了し，認定結果がでたら，センターから学生に。認定証は大学にも記録される	評価は，各教員が責任を持って行う リフレクションは，日誌，レポート，グループディスカッションなどを組み合わせて行う Web 上で行う場合もあれば，直接会って行う場合もある
	単位科目は科目認定教員が認定する	科目認定教員が認定する
センターの機能	コミュニティ組織の要請・選択・協働方法の検討 コミュニティ・学生・教員からの相談受付 S-L のアレンジメント・学生の進行状況モニタリング Web 上でのコース紹介・履修登録・リフレクションの受付・評価や認定証の発信 S-L に関するシステムの構築と改善 S-L の開発に関する助成の決定と運営に関与	コミュニティ組織のリクルート・選択 コミュニティ組織との教育理念の共有など（教育的協働） 学生の履修登録・相談・オリエンテーション 教員との連携・コース開設の働きかけ HP 開設，Web 上でコース紹介・履修登録など
コミュニティ組織	1,400以上のコミュニティパートナーと連携を維持 学生は1年間で850のコミュニティ組織で活動 コミュニティには年報など情報を送り，1年を通じて S-L 参加要請を行っている。地域の人材活動ネットワークにも参加。センターから直接出向いてボランティアの状況を把握したり，検討する	選択基準：組織の歴史，これまでの大学との関係，地域への貢献 発表会に招くこともある，謝金なし 学生がコミュニティに出て行くこと，それを迎え入れることをコミュニティへの貢献と捉えている
今後の課題その他	課題： ・大学外からの助成金を得ること ・他の大学の活動などから，S-L センターの機能をさらに高めていくこと ・学生は，一般市民とともに，ボランティアとしての教育を参加した施設でも受けて活動する ・地域のニーズにこたえること，「よき市民」であることの体験の重要性 ・新しい学生主導のプロジェクトや，市民参加のプロジェクトなどに助成金を出して，開発をしている	課題：履修する学生を増やす・センターのスタッフを増やしたいが，なかなか大学の理解が得られない（ポジションが不安定）・CBPR に意図的につなげたい・コミュニティ・学生・教員をつなげたい・教員の関わりを増やしたい・脱落者が10％程度いるのでその対応 共通科目の「看護」のコース例 『ホームレスの子供たちへのサービス』 講義にはもとホームレスの若者，医師，家族が専門のソーシャルワーカー，政策担当者，ファミリー・セラピスト，薬物の専門家，自分自身がメンタルの問題を持っていたソーシャルワーカーも参加
HP URL	http://www.uwec.edu/sl/	http://depts.washington.edu/leader/

1．支援拠点

UWis オークレアでは，サービス・ラーニングセンターとして，UWas シアトルではリーダーシップセンター＆パブリック・サービス・センターとして設置されていた。

2．センター支援体制

UWis オークレアは州立大学であり，サービス・ラーニングは，オークレアのみでなく，全学の体制であった。オークレアのサービス・ラーニングは大学の直属センターであり，センター長1名，非常勤数名，大学院生の体制で，オークレアボランティアコーディネーターネットワークとの連携・支援体制を持っていた。

UWas シアトルは，常勤の職員（コーディネーター）3名，非常勤，大学院生などヘルスケアを学ぶ学生のための S-L 支援組織 CCPH のワシントン支部が近くにあり，常時，連携・支援を得て運営されていた。

両センターでの学生の履修に関する教員とのコミュニケーションは，すべて電子化されていた。

3．開講コース

UWis オークレアにおいては，必修と選択科目があった。単位認定コースは120以上で，看護学部は，13科目（コース）を開講していた。S-L が必修の学科（看護も含む）もあり，単位化されないプロジェクトも他に多数あった。

UWas シアトルでは，サービス・ラーニングは選択コースのみで，共通科目として30コースが準備されていた。共通科目の中に，「看護」のコースがある。インターンシップとして入る場合もあり，選択制，定例と単発のプロジェクトがあった。

4．コース内容の概要

UWis オークレアでは，対象を学部生全学年としていたが，主に，大学のミッションである良き市民の育成に重きをおき，新入生に焦点化していた。各学科に開講しており，年間の履修生は約3,000名であった。基本は1単位が15時間で，“Full コース”と呼ばれる30時間，特殊な50時間というコースもあった。サービス・ラーニングは科目によって講義も含まれ，救急蘇生などのトレーニングや文献講読が準備として設けられている科目もあった。

UWas シアトルでは，学部生や大学院生の全学年を対象に，各学科に開講されていた。年間の履修生は約80名であった。基本的には1コース5単位で，10週間で多くとも20時間までコミュニティに出向いて活動していた。コースは講義・グループワークなどと組み合わせながら，継続的にコミュニティに出ていくようになっていた。

5．評価・認定方式

UWis オークレアでは，S-L 実施中はコミュニティ・パートナーと，教員／スタッフが定期的に会って，活動状況を評価していた。また，評価の対象の重要なひとつが，学生がサービス・ラーニング中に行ったリフレクションの内容であり，電子的に教員やセンターに送付された日誌とリフレクションペーパーで，ボランティア活動の中での学びが評価されていた。プロジェクトのスーパーバイザーからセンターが仲介して評価を得，最終的に担当教員が科目の単位を認定する。認定結果が出たら，センターから学生に評価と認定証が送られ，結果は大学にも記録されるようになっていた。

UWas シアトルでは，各教員が指導と単位認定を責任を持って行っていた。リフレクションは，日誌，レポート，グループディスカッションなどを組み合わせて行っていた。これらの学生のリフレクションのモニターは，Web 上で行う場合もあれば，直接会って行う場合もあった。

6．センターの役割・機能

UWis オークレアのセンターの役割としては，第1に，大学とコミュニティを繋ぐことであった。サービス・ラーニング受講の学生ボランティアを受け入れるコミュニティ組織への要請や選択，そして協働方法の検討を行っていた。第2は，コミュニティ，教員，学生間の調整を行うことであり，センターはコミュニティの受け入れ先，受講生，教員それぞれからの相談にのって，コミュニティ活動自体が円滑に進むように，関係を調整して支援していた。第3に，S-L のアレンジメントや学生の学習の進行状況のモニタリングを行うことであった。第4に，Web 上でのコース紹介，履修登録，リフレクション記録の受付，そして評価や認定証の発信をしていた。第5に，S-L に関するシステムの構築と改善や，S-L の開発に関する助成の決定と運営に関与していた。

UWas シアトルでのコミュニティ・サービスセンターの役割・機能としては，第1に，コミュニティワークの受け入れ先であるコミュニティ組織のリクルートや選択，そして，コミュニティ組織との教育理念の共有など（教育的協働）があった。第2に，学生の履修登録や履修や学習に関する相談やオリエンテーションを行っていた。第3に，教員との連携やコース開設の働きかけを行い，大学のコミュニティ・サービスの活発化を促していた。第4に，HP 開設や Web 上でのコース紹介や履修登録などがあった。

7．協働するコミュニティ組織

UWis オークレアでは，1,400以上のコミュニティ・パートナーと連携を維持していた。学生は1年間で850のコミュ

ニティ組織で活動しており，コミュニティには，センターの年報など情報を送り，1年を通じてS-Lへの参加要請を行っていた。地域の人材活動ネットワークにも参加し，センターから直接出向いてボランティア活動の状況を把握し，今後の連携活動について検討していた。

UWasシアトルは，大学と協働するコミュニティ組織の選択には基準（組織の歴史，これまでの大学との関係，地域への貢献）を持っており，その基準に従って選択されていた。これらの協働するコミュニティ組織には，謝金を払うことはなく，コミュニティサービス活動の発表会に招くことにより，コミュニティ組織との連携を強め，活動を推進していた。また，コミュニティ組織では，学生がコミュニティに出て行くこと，それを迎え入れることがコミュニティへの貢献と捉えていた。

8．今後の課題

UWisオークレアのサービス・ラーニングセンターが掲げる今後の課題や，さらに強化したい点をあげる。第1に，大学外からの助成金を得ることによって，さらに，S-Lセンターの機能を高め，加えて，他大学との連携も強化していくこと。第2に，学生が，サービス・ラーニングの受講後も，学生ボランティアとして学習に参加した施設で，一般市民として継続して活動すること。第3に，学生が継続的に，地域のボランティアとして活動することを通じて，地域のニーズに応える，「よき市民」であることの体験の重要性を認識でき，行動できること。さらに，第4に，センターが，新しい学生主導のプロジェクトや，市民参加のプロジェクトなどに助成金を出して，活動を支援・開発していくこと。

UWasシアトルが掲げた課題は，大きくは4点あげられた。第1に，履修する学生を増やし，センターのスタッフを増やすこと。そのために，大学の理解を得ること。第2に，Community Based Participatory Research（CBPR）に意図的につなげ，コミュニティ，学生，教員をつなげ，コミュニティサービス文化を定着させること。第3に，受講生の中に脱落者が10%程度いるので，その教育的関わりを検討すること。第4に，共通科目の「看護」のコース，『ホームレスの子供たちへのサービス』のように，講義にはもとホームレスの若者，医師，家族が専門のソーシャルワーカー，政策担当者，ファミリー・セラピスト，薬物の専門家，自分自身がメンタルの問題を持っていたソーシャルワーカーも参加しているので，学際的コミュニティサービス活動を拡大展開すること。

Ⅳ．考　察

米国においては，看護領域においてもサービス・ラーニングは広く導入されてきている。今回先進的にサービス・ラーニングを進めている2大学を比較してみると，どちらの大学においても，サービス・ラーニングの基本理念を基盤としているため，選択性の共通科目として導入している点では共通していた。しかしながら，サービス・ラーニングの教育運用に関しては異なっていた。

1．教養科目，あるいは地域ケア関連科目としてのサービス・ラーニング

ウィスコンシン大学では，州立大学であることを反映して，全学大学生に対して，まず良き市民となるための教養科目としてサービス・ラーニングは発展してきている。しかし，ワシントン大学は，教養科目という位置づけより，むしろ地域ケア関連の学際的，地域参加型学習方法として運用していると理解できる。

2．サービス・ラーニングの支援センターの重要性

両大学ともサービス・ラーニングの支援センターを設置し，大学の地域サービスの一部として，教育の要素を導入していた。支援センターは，人々・学生・教員を引き合わせ，有機的に結びつけ，地域と大学の架け橋となるとともに，教育的役割を果たしていた。センターには，コーディネーターと呼ばれる専属職員が配置されていた。コーディネーターは，地域のサービス・ニーズと学生の学習ニーズとを適合させ，学生を学習への動機づけの段階から履修終了まで随時サポートしていた。積極的に地域に出向き，学生を受け入れるコミュニティ組織と教育理念の共有を図ると同時に，学内においても開設コースを増やすよう，サービス・ラーニングについて教員の理解を促す働きかけも行っていた。センターのWebサイトでは，コース紹介や履修登録など学生向け学習支援システムだけでなく，学生のオンタイムな活動紹介や学生受け入れ登録の呼びかけなど地域に向けた発信も行っていた。サービス・ラーニングセンターは，大学の地域への貢献を推進する役割を果たしているといえる。

3．リフレクション（振り返り）と学生の学び

サービス・ラーニングの学習過程で重要な点は，地域でのボランティア活動の経験から学ぶことであり，経験から学ぶ手法の中心は，リフレクション（振り返り）であった。

学習過程の中で重要とされるリフレクションは，コースの単位認定者である教員が中心に行う。リフレクションは，学生が活動を記録（日誌）したり，まとまった活動についてレポートを作成することによって，あるいは，学生間でのディスカッションや，面接など様々な方法によって行われていた。

コースでの地域ボランティア活動の体験とその振り返りの学習過程の中で，学生は，教科書の知識だけでは説

明できない現実があること，さまざまな価値観があることを知り，さらに，それまでの自らのステレオタイプの考え方を広げ，目前の現実の捉え方が変わるという経験ができると考えられた。

V．まとめ

米国の2大学のサービス・ラーニングセンターあるいはコミュニティ・サービスセンターの比較検討から共通性が見出された。共通性は，両センターとも，カリキュラム運営上，地域と学生，教員をつなぐ重要な機能を持ち，学生の学習活動を全面的に支援することであり，両センターともこの点では一定の成果をあげていたことである。これらの2大学のセンターでの教育実践から，看護も他の地域ケア領域と同様に，まず，地域の一員として地域を捉え，実情を知ることから始まり，看護学生も，他の専門職学生と同様に，高等教育の基礎課程で，市民として地域サービスに参加して学び，“良き市民”としての，教養を養い得ると，サービス・ラーニング学習の教育的重要性を認識した。この効果的，サービス・ラーニングを支援するために，センターと専属スタッフ，Web サイト・コンテンツ開発が課題であること，学生個人の社会貢献のみならず，大学も地域の一部という大学・教員の地域参加の認識が大切であり，これらのことを加味した教育プログラムの開発が重要であることが示唆された。

現在，聖路加看護大学は，COE において，「市民主導型の健康生成」の研究を進めている。この市民主導を支える看護職の活動を学部学生が学習するには，サービス・ラーニングという学習形態は非常に有効であると考える。サービス・ラーニングは米国に限らず，英国も進んできている。グローバルネットワークの中で，国内の地域貢献とともに，国際的にも貢献できる学生の育成が可能になると考える。

引用文献

1）　松谷美和子，田代順子，香春知永他．看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー．聖路加看護大学紀要．30，2004，pp. 31－38.

2）　Billings, D. A. & Halstead, J. A. Teachig in Nursing －A Gude for Faculty－. 2nd ed. Elsevier Saunders, 2005, p217.

3）　田代順子他，思春期健康増進のための学生ヘルス・ボランティア養成プログラム開発とその評価研究，平成14年～16年度科学研究費補助金研究成果報告書，2005.

4）　Center for Service-Learning University of Wisconsin-Eau Claire, Annual Report, FY2003-04, 2004.

5）　Center for Service-Learning University of Wisconsin-Eau Claire, Service-Learning Guidebook, 2005.